

---

## 巻頭言

---

# 研究年報の創刊を祝して

所長 森田昌幸

長年の夢であった語学教育センターが城西大学にでき、またここに語学教育の教授法に関する研究論文集が創刊されましたことは、外国語教育の発展拡充という見地からも大変よろこばしいことです。このたびここに掲載した論文は、どれもみな、いかにして外国語を合理的かつ有効に教えていくかという、実に困難な課題に対して、長年にわたって挑戦してきた執筆者の力作です。

それぞれの論文に共通する特徴は、語学教育の実践的な教授法を執筆者自身の経験にもとづいて開発したところにあります。しかもその方法は、すべて本学の学生との教室での授業が基礎となっています。このことから、ここに掲載した論文が単なる注解や解説ではなく、教え方の原点であり源泉であると自負しています。いわば城西メソッドともいうべきものです。

This is the way, You can make it! が私ども語学教育センターのモットーです。つねに「こうすれば、あなたもできますよ」と呼びかけ、ひとりでも多くの人が実際に役に立つ外国語をマスターできるよう配慮し努力しています。

これまでの日本の大学における外国語教育は、とかく文法と長文読解と称する文学作品の解釈が中心となり、その結果として読むことはできるが、書いたり聴いたりすることができないという学生を大量に輩出してきました。日本人が日本国内で生活しているだけであれば、これはこれでよかったかも知れませんが、今や日本そのものが国際化という潮流の真っ直中に投げ込まれ、もがきながら漂っている昨今、これまでのような文法と読解だけでは、もはや国際化の潮流を乗り切っていくことはできなくなりました。書いたり、聴いたり、話したりすることは、とても大切なことです。外国語で自由にそれができなければ日本は国際社会

でおくれをとるでしょう。

かつて幕末から維新の初めにかけて、わが国には外国の文物が滔々と流れ込んできました。日本での第1次国際化といってよいでしょう。この頃の外国語は初期はオランダ語でしたが、やがて英語に転換していきました。しかし明治政府の外交路線が極端な欧化主義であったため、外国文化との交流が重視されず、もっぱら一方的に取り入れるだけとなってしまいました。英語に関しても、英語で自己主張するのではなく、英語で何と書かれているか読み取ることに力を入れました。ですから当然の結果として、日本人の多くは英語で書いたり、聴いたり、話したりすることが苦手となりました。明治初期の頃のことですが、He comes sometimesを「ヘ コメス ソメチメス」と発音していたと伝え聞いたことがあります。これは少し極端な例でしょうが、しかし当時はおおむねこういうことだったのでしょう。国際社会との交流を重視すれば、必然的にコミュニケーションが大切なことになり、いかにして伝えるかを考えざるをえません。本当に真剣に伝えようと努力すれば日本人の苦手なthの発音にも慣れることができます。やればできる(You can make it)の精神が大切です。

私たち城西大学語学教育センターでは、この「やればできる」精神で外国語の教育に対し全力で取り組んでいます。しかし「やればできる」精神も、ただやみくもにやってみてもだめです。教えるほうも学ぶほうも、しっかりとした科学的方法に立脚していなければ効果がありません。

この研究年報にこのたび収録された論文は、それぞれ科学的方法による教授法を追求したもので、まさに城西メソッドともいうべきものです。このような論文が掲載された年報が創刊されますことは、それ自体よろこばしいことであり、同時に語学教育センターもまた隆々と発展しつつある証左であろうと思います。

ここまでの道程には実にきびしいものがありました。水田理事長、田中学長を中心として、城西大学が全学的に燃え上がるエネルギーを結集し、長年の夢を実現させることができました。これまで支えて下さった多くの人々に深く感謝いたします。そしてこの年報の創刊を心から祝いたいと思います。そしてこれからも越坂部副所長ともども努力を重ねてまいりますので、どうぞご支援を賜りますようお願いいたします。